



そして今度は『虞美人草』同章の色彩表現に着目する。これに関しては絵画技法と照らし合わせて箇条書きにしようと思う。多様な「白」の表現については、それを「色」として捉えるのではなく「明度」として捉える。

【sfumato スフマート・伊】レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452.4.15～1519.5.2)をはじめとするルネサンス期の画家が創始した技法。深みとヴォリュームを出すため色彩の透明な層を重ね、色の境界を際立たせず、形状を表現するぼかし技法。その代表的作品が「モナ・リザ」

第八章文中には『一本の浅葱桜が夕暮れを庭に曇る』『夜を陽に返す洋灯の笠に白き光りをゆかしく罩めて』『唐草を一面に高く敲き出した白銅の油壺が晴れがましくも宵に曇らぬ色を誇る』という丸みを帯びて浮かび上がる輪郭線の曖昧な情景がある。

【valeur ヴァールール・仏】明暗とその位置関係で対比させる。

【impasto イムパスト・伊】明暗をはっきりさせることによってある色を強調する。

縁側を渡る藤尾の「変わり色の厚く折り返した裾」と「足を細長く見せる今卸したかと思われるほどの白足袋」は形状の対比と白色の強調。

【chiaro scuro キアロ・スクーロ・伊】レオナルド・ダ・ヴィンチによって始められたデッサン技法。灰色の中に黒（木炭、チョーク）と白（パステル、チョーク）で描く。

【trois dessin トロワデッサン・仏】バロック期のルーベンス(1577.6.28～1640.5.30)によるデッサン技法。キアロ・スクーロの中に暖色を一つ入れてアクセントをつける。

『佐倉炭の白き残骸の完きを毀ちて、心に潜む赤きものを片寄せる。温もる穴の崩れたる中には、黒く輪切の正しきを択んで』 白と黒の間に赤という暖色がある。

それから「薩摩の急須」に着目する。薩摩焼には大衆向けの黒薩摩と豪華絢爛な白薩摩があるが、本章のはヒビ入り素地に彩色されている白薩摩である。白薩摩は淡い黄色の地に無色の釉薬をかけるので、焼き上がった時に素地と釉薬の収縮差で細かいヒビができる。それは「モナ・リザ」をはじめとする油彩画の下地・彩色・釉薬の寿命差から生じるヒビを連想させる。また薩摩焼は、パリ万博で人気を博したことから欧米の輸出用として主に京都で絵付けして輸出された。その万博を漱石は見ている。

そして見る角度を変えると、画工の光線の加減で、「モナ・リザ」の顔に伏された暗号の如く漱石が技法でカムフラージュした暗号が『隙間なく渋の洩れた劈痕焼に、二筋三筋藍を流す波を描いて、真白な桜を気儘に散らした薩摩の急須』に浮かび上がる。薩摩といえば西郷隆盛。そこに日本の国花と言える命はかなき桜花を散らすということ。「宇治の茶、薩摩の急須、佐倉の切り炭」というブランド品の羅列を、趣なき会話を嫌う作者である漱石は『一弾指頭に脱離の安慰を読者に与うるの方便である』と断る。しかしそれは西郷を語ったことを追求させないための方便ではなかったか？幾重にも塗られた「白」は、西郷の「潔白」を際立たせるための描法ではなかったか？そして地球は回転する。そこで宗近一を行ったきり戻ってこない「鉄砲玉」に例えた漱石は、甲野の父に代表される当時の外交官の「命の明暗」をスフマートで描く。

少なくとも「女の謎を解明する」ことを文筆で目指す漱石は、この『虞美人草』第八章で、絵画で女の謎を描き得たレオナルド・ダ・ヴィンチに挑戦している。(2013.9.14)